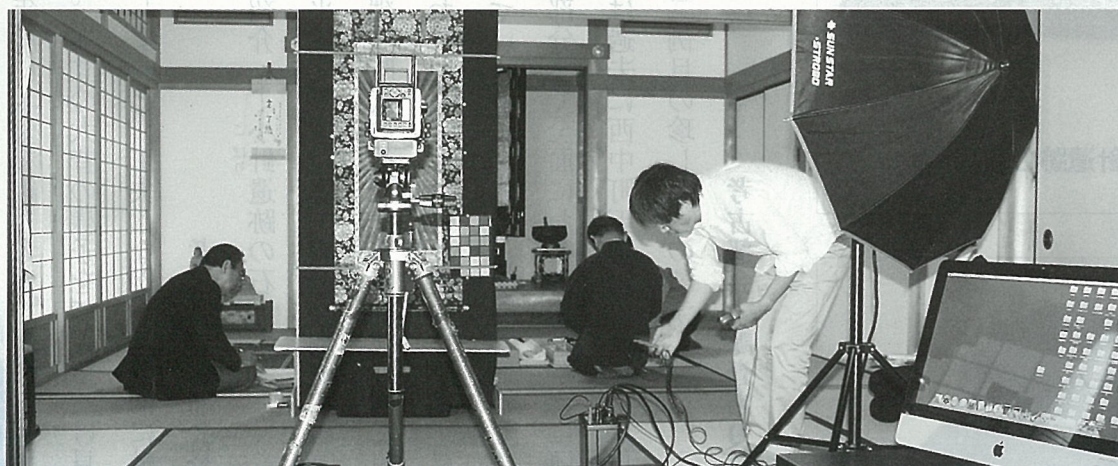


新編 知立市史だより

第4号



文化財調査
平定二十六



文化財委員会では、調査が佳境に入っています。市内各所で調査を実施し、最新の技術で撮影を進めて今年度秋より執筆に入っております。刊本のサイズはA4判でオールカラー印刷です。ご期待ください。

知立市の遺跡と出土品を オールカラーで

昭和五十九年以降、知立市内各地では、土地改良事業、区画整理事業、住宅建設等に伴う発掘調査が継続的に行われてきました。

これらの調査で、縄文時代は二遺跡から竪穴住居跡四棟、弥生時代は三遺跡から四十棟の竪穴住居跡と掘立柱建物跡や方形周溝墓、また、溝や穴の中から木製品や多量のどんぐりも見つかりました。古墳時代から古代にかけては、四遺跡から竪穴住居跡三十六棟、中世では溝で区画された屋敷跡から井戸や墓も見つかり、なかには鏡や、鉦鼓、笏杖等の仏教用具が副葬された墓もありました。

市民の方が収集された、旧石器時代にさかのぼるナイフ形石器（高根散布地）や、木葉形尖頭器（八ツ田散布地）等もたらされました。

また、考古資料の自然科学分析もとりにいれて、黒曜石の原地推定や、放射性炭素年代測定、縄文土器片についての穀物圧痕の調査等も行い、新たな知見が得られました。

現在資料調査がほぼ終わり、時代別、遺跡別に整理し、図版作成、写真撮影、原稿執筆にかかっています。

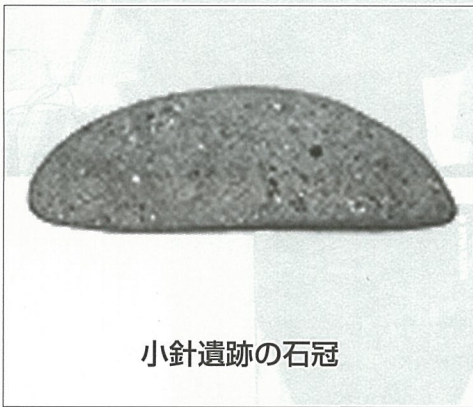
平成二十六年度に『資料編 考古』がオールカラーで刊行される予定です。知立の大昔の様子をできるだけ見やすくわかりやすいものにしようと、工夫しながら精力的に進めています。

考古部会 部長 清水正明

○新発見資料紹介 — 小針遺跡の石冠 —

小針遺跡（平成七年度発掘）の遺物調査で石冠が見つかりました。石冠は縄文時代の後期から晩期にかけてみられる石器です。祭祀に使われたものといわれていますが、具体的な使用の実態はわかっていません。石材は濃飛流紋岩の自然石を利用し、石の凹み部分まで全面にわたって、丁寧に研磨されています。知立市では過去に西中町天神遺跡からの採集品が知られており、今回が二例目の珍しいものです。

考古部会 調査協力員 矢田直幸



小針遺跡の石冠

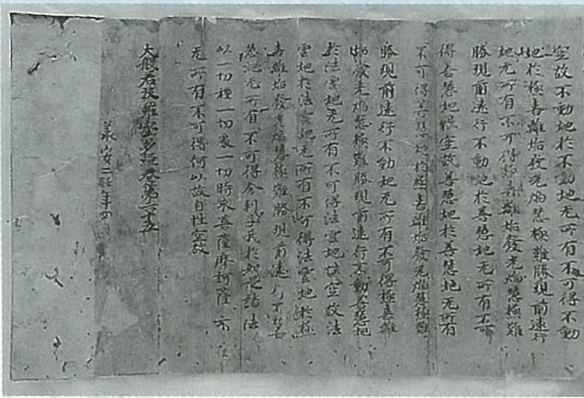


天神遺跡の石冠

遍照院所蔵大般若波羅蜜多經

二〇一二年十一月十二日～十五日に、弘法町の遍照院（真言宗）所蔵の大般若波羅蜜多經の調査を実施した。閲覧を許可くださった横井杲銚住職に感謝したい。文化財委員会の愛甲昇寛委員、風岡正明委員と共に調査を行った。

大般若波羅蜜多經とは般若經と名付けられた多くの經典を集大成して唐の玄奘が訳した全六〇〇巻のものを指す。大般若經と略称され、奈良時代より鎮護国家や除災招福のために誦誦された。その後も各地で書写・誦誦され、現在も多くの寺社などに伝来している。



平安時代に書かれた大般若經 卷第六五

いつ誰によつて書写された經卷なのかを確かめるため、同年八月二十一日に再び調査がなされ、その成果が『知立町誌「文化財編」(一九六九年刊行)にまとめられた。大般若經は六〇〇巻にも及ぶため、何年もかけて書写したり、また欠巻が生じると他の寺社の經卷を写して補った

りする。どの寺社の經典をもとに書写したのかを探ることによつて、当時の人々の交流や有力な寺社の存在を知ることができる。

例えば、遍照院の大般若經には鎌倉末期に寂一が猿投神社(豊田市)に奉納した經卷があり、室町時代に知多郡成岩(半田市)で書写された經卷もある。猿投神社にあつたと推定される六〇〇巻の大般若經は江戸時代初期に名古屋天王坊に移され、一八七二年の神仏分離の際、遍照院に伝えられたことが知られる。

特記したいことは、今回の調査において一九六三年の調査で確かめられていなかった經卷が愛甲委員によつて新たに発見されたことである。しかも平安時代に書写された奥書を有するもので、非常に貴重である。卷第六十五の奥書に「承安二壬辰年四月」とあり、それは一二七二年の平清盛の時代のものである。

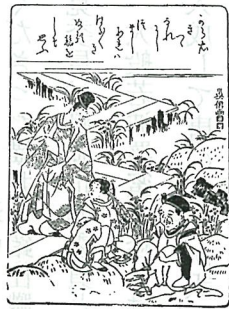
愛知県史中世史部会では県内の大般若經を調査し、それには数多く参加したが、このような古い經卷が新たに発見されたことは初めてのことである。愛知県内で平安時代の年記のある大般若經は数少なく、実に貴重な発見といえる。このような発見がもたらされたのは市史編さんの事業のおかげである。今後市民の方々のさらなるご協力・ご理解をいただきながら、この事業を充実させていければと願うところである。

一八二四 古代・中世部会 調査執筆委員 水野智之

「八橋」について 『三河国八橋略縁起』

愛知県以外の場所で「八橋」と聞いて連想するものを尋ねると、京都の和菓子「八ッ橋」（片仮名の「ッ」を入れる場合が多いようです）を思い浮かべる方が多いことでしょう。餡（あん）などを入れて三角形に折った生八橋がポピュラーですが、本来はニッキ味の堅焼きせんべいです。由来については二つの説があり、その一つは三河八橋と関係があります。無量壽寺所蔵の略縁起『三河国八橋略縁起』に載る母子の悲話（八橋の地名由来を語る靈験譚）に感動した店主が、橋の形に似せたせんべい菓子を作って「八ッ橋」と名付けた、というのです。

三河国八橋略縁起 全



『三河国八橋略縁起』

上の『三河国八橋略縁起』の図は、無量壽寺境内の八橋史跡保存館に展示されている版本から刷られたものです。「略縁起」とは、神社や寺院の起源を説明し信仰の権威付けを行うもので、

いわば参詣者に配布された観光用のパンフレットです。

この『三河国八橋略縁起』の絵には、カキツバタが咲く湿地に稲妻状にかかった橋の上に在原業平と二人の従者が描かれています。その落款に「墨僊」と見えます。牧墨僊（一七七五

一八二四）は、喜多川歌麿と葛飾北斎に学んだ尾張藩士。文化三、四年（一八〇六、七）頃から没年までこの号を使用していたようなので、『三河国八橋略縁起』はその間の制作にかかると推測できます。三河八橋再興の祖である方巖売茶翁が当地へやってきたのが文化二年（一八〇五）、亡くなったのが文政十一年（一八二八）であることも矛盾しません。古代・中世部会では、調査活動の一つとして「八橋」に関する資料を収集しています。「八橋」が歌枕の地として知られるようになったのは、何と云っても在原業平が「からころも着つなれにしましあればはるる来ぬる旅をしぞ思ふ」の歌を詠む『伊勢物語』第九段「東下り」および『古今和歌集』巻第九・鞆旅歌（四一〇）の影響が大きいです。交通の要所でもあったため、多くの旅人が立ち寄り、「八橋」に言及した紀行文を残すことになりました。

また、『伊勢物語』は成立当初から絵を伴って鑑賞されたと考えられています。が、「八橋」は特に好まれた場面の一つでした。「八橋」の場面は、『伊勢物語』本文に忠実に描かれる物語絵としてだけでなく、主人公の在原業平を描かず、「流水・板橋・カキツバタ」のみが表される工芸作品の意匠としての方向や、名所絵としての方向に大きく発展したところが特徴であると言えます。

古代・中世部会 調査協力員 木戸久二子

刈谷藩家老日記と池鯉鮒宿

近世部会では、平成二十三年三月に『新編知立市史』第五巻として『池鯉鮒宿本陣御宿帳』を刊行した。その一八九頁上段に、正徳四年（一七一四）八月二十七日、松平紀伊守が本陣に一泊したことが手短かに記録される。巻末索引を利用すれば、それが京都所司代であった丹波篠山藩主松平（形原）信庸のことだと容易に分かる。

さて、近世部会ではいま「資料編 近世」に掲載する資料を求めて、岡山大学附属図書館所蔵の三浦家文書に収められた三浦家家老の日記を読み進めている。三浦家は正徳二年に日向国延岡から刈谷へ城替えとなり、延享四年（一七四七）まで刈谷藩主である。現在の知立市域の一部は刈谷藩領に属し、また池鯉鮒宿は刈谷藩が預かった。

家老日記によれば、正徳四年七月・八月には大雨が降った。とくに八月八日の大風によって、刈谷城内外の様々な建物に損害の爪痕が残された。池鯉鮒宿から大濱村にかけての街道沿いに植えられた松並木もなぎ倒された。同じ大風によると思われる京・大坂での損害は、この四十年で最大の規模だったと報された。そんな最中の二十六日、やはり大風で破損した池鯉鮒宿本陣に、京都所司代が一泊するとの予約が入った。刈谷藩は修復材を大急ぎで特別に手当てをし、所司代の来着に間に合うよ

うに本陣を修繕させた。「宿帳」の記述では何の変哲もない一泊に過ぎないが、実はたいへん荒れた天候のなかの一泊だった。ところで、家老日記によって正徳四年の毎日の天気を整理すると、五月と七月・八月の晴天日数が少なめに感じられる。この年は植物の生育に必要な日照時間が不足していたのではなかったか。翌年の家老日記には刈谷藩領各地に飢えた人びとが溢れている。正徳五年二月十二日、領内に飢えた人びとが多く、このままでは人馬役を勤めきれないと考えた池鯉鮒宿は藩に食糧援助を願い出た。藩は御蔵から二〇〇石の米を村々に配分すると決めた。麦の収穫まであと八十日とすれば、それまで飢え

死にしない才覚が必要であった。領内人口二万三〇〇〇人のうち三分の一が飢えていると仮定し、飢人だけに米を配給するよう工夫すれば、これだけの米で四十日は食いつなげるだろうという。

正徳四年・五年の「宿帳」には、これら喧噪の臭いが微塵もない。いつもと同じように大名・公家たちが宿泊し休憩してゆく様子が淡々と記録されるばかりである。

近世部会 部会長 池内 敏

月	晴日数
1月	19 (21)
2月	21 (22)
3月	16
4月	20
5月	11 (13)
6月	20 (23)
7月	17 (18)
8月	11 (13)
9月	14 (16)
10月	19
11月	25
12月	12 (13)

三浦家目録による正徳4年の刈谷城下の天気（ ）内は、「晴のち曇」などを含む日数分

活動記録

(平成24年8月27日～25年9月)

◎編さん委員会 25年8月22日

◎編集委員会 24年9月28日、25年2月

8日、4月12日、7月5日、9月27日

◎部会

考古部会

24年9月9日、12月9日、25年2月3日、4月20日、6月30日、7月28日、9月1日、9月27日

考古部会の作業室では、出土した土器や甕などの実測図をイラストレーターを使って図面に起こす作業が続いています。原稿執筆は順調。

古代・中世部会

24年10月12日、12月14日、25年2月8日、5月31日、7月12日、9月27日

この部会が一番少人数ですが、来年度刊行に向けて原稿執筆が進んでいます。三河・碧海郡および知立に関する資料収集はおおむね完了しました。

近世部会

部会としては実施されていませんが、毛利家はじめ視点を広く全国に向けた資料収集により、新たな市史への期待が高まります。

近代・現代部会

24年9月1日、11月23日、25年1月6日、2月23日、4月20日、5月12日、6月30日、7月20日、8月25日、9月15日

愛知県公文書館を始め国立公文書館、市内旧家などの調査を実施。旧家からは、幕末から昭和にかけて大量の出納帳が見つかり、地域経済を知る良いデータが集められました。

民俗部会

地区聞き取り調査関係

24年11月25日、25年1月19日、6月16日、8月31日

町部商店など個別調査

市内の古くからある商店や生業（鍛冶や農業）関係について、18か所の聞き取り調査を行いました。

まつり関係

知立まつり・秋葉社祭礼など、主な準備からまつり当日・片づけまで、22回の実地調査を行いました。

自然部会

24年9月29日、10月6日、12月8日、25年1月19日、2月11日、4月6日、4月27日、7月21日、8月3日

生物班合同調査

24年10月6日、25年5月25日

観測装置のデータ回収

24年10月27日、25年3月9日、5月12日、7月21日、9月7日

移動観測・地中温度観測・熱帯夜観測

25年2月3・9日、7月28日、8月3日 熱帯夜観測では、深夜2時～5時にかけて市内32か所の温度・湿度観測を行いました。

文化財委員会

文化財調査日

25年6月16日
24年9月29日、10月9・10・21・24日、11月5・7・12・16・18日、12月15・21・22日、25年2月22・28日、3月31日、5月15日、6月2・21・28日、8月19日、9月5・11・24日
(調査地)
顕真寺・無量壽寺・八橋史跡保存館・了運寺・在原寺・泉蔵寺、小松寺・萬福寺・遍照院・源心寺・弘願坊・宝蓮寺・善光寺・来迎寺・法信寺・順誓寺・総持寺・知立神社・宝蔵寺・浄教寺・西中神明社(調査順)

その他建築調査関係11か所

23年度より悉皆(予備)調査・本調査を実施してきましたが、おおむね完了しようとしています。

からくり人形公演を拜見して

平成二十五年六月九日午後一時より、知立神社においてからくり人形の公演がありました。この公演は、知立市観光協会の要請により、知立からくり保存会が花しようぶまつりの行事の一環として開催しているものです。



公演後の和やかな交流風景

終了後観客と関係者（からくり師や浄瑠璃語り・三味線他）との交流がありました。市史編さん係民俗担当も公演記録のため参加させていただきました。会場では、人形とからくり師とをつなぐ糸の引き方で人形がどのように動くかという実演や、

浄瑠璃語りの使う底本ゆかほんなどを見せてもらい、子供から大人まで和やかな時間を共有することができました。

からくりの仕組みや公演の裏側を公表することは、全国的にも珍しいとのこと。県外の方からも賞賛の声があり、からくり人形関係者の前向きな活動に頭が下がりました。この試みはすでに十年以上も続けられているそうです。

なお、市史編さん係では、百年後でもからくり人形を復元できるように、代表的な人形の作図を専門家に依頼しています。今年度は「二の谷合戦」に登場する岡部六弥太おかべろくやあたです。来年度は「平治合戦」で活躍する礫喜平次つがきへいじを予定しています。文化財の重要な記録・保存のひとつとなればと考えています。



岡部六弥太（「一の谷合戦」に登場するからくり人形）

市史編さん係では、資料収集と調査のために市内各所にお邪魔しております。この場をお借りして、心よりお礼申し上げます。

資料・情報収集について



昭和30年代のミゼット



町内会文書など

地域に関する古い資料を探しています。たとえば

- ① 代々伝わる古文書
- ② 写真（地区の行事や古い町並み、その他）
- ③ 古い地図
- ④ 役所（知立町時代を含む）からの通達文等
- ⑤ 町内会文書

その他知立市の歴史を知る上で参考になるものがありましたらお知らせ願います。

編集後記

「市史だより」も第四号となりました。今回は資料紹介を中心に、お知らせしました。遍照院所蔵の平安時代の奥書がある大般若経は大発見でした。

市民の皆様方には、地区の聞き取りをはじめ動物の目撃情報やせみの抜け殻収集など、たくさんのご協力をいただきありがとうございました。

今年は昨年が増えて暑い夏でした。市史編さん係も夏に負けない熱い想いで、『新編知立市史』に取り組みます。

お問い合わせ

知立市教育委員会文化課市史編さん係

〒四七二―〇〇五三三

知立市南新地二丁目三―三

歴史民俗資料館内

TEL 〇五六六―八三一六七八九

FAX 〇五六六―八三一六六七五

（図書館・資料館・市史編さん係共通）

E-Mail sisi-hensan@city.chiryu.lg.jp

新編知立市史だより第四号 平成25年11月1日発行
発行 知立市教育委員会文化課 市史編さん係